

令和6年度 外部評価懇談会記録

○日 時 令和6年9月12日 10:00~12:10

○会 場 オンライン (Teams) 開催

○内 容 「学修者本位の教育の工夫」

○出席者 **(外部評価委員)**

川島啓二氏 (京都産業大学)

杉谷祐美子氏 (青山学院大学)

(本学)

島田昌和理事長・学院長、福井勉学長、上村佳世子副学長、川良徳弘副学長、中山智晴副学長、恒吉僚子副学長、金彦叔外国語学部長、小栗俊之人間学部長・人間学研究科委員長、神作一実保健医療技術学部長・保健医療科学研究科委員長、フェアバンクス香織外国語学研究科委員長、大野和巳経営学研究科委員長・経営学部教務委員長、横田素美看護学研究科委員長、亀川雅人福祉医療マネジメント研究科委員長 (専門職大学院)、渡部吉昭 GCI センター長、西方浩一教務部長、飯島史朗学生部長、藤谷克己学長補佐、椛島香代学長補佐、小林剛史学長補佐、各学部教務委員長 (能間寛子准教授、森下葉子准教授、中俣修准教授)、浜正樹新学部設置準備委員長、平田博紀経営学部教授、米澤純子保健医療技術学部教授、橋本博幸法人事務局長、品田容子法人事務局総務部長、中島弘高統括ディレクター・本郷キャンパスディレクター、田中綾子ふじみ野キャンパスディレクター、三俣正治本郷キャンパスディレクター補佐、角田千春本郷キャンパスディレクター補佐、五十嵐康雄学生支援センター長、須永清美教務マネジャー、梅本行宏教務マネジャー、田中真由美教務マネジャー、佐々木稔教務マネジャー、紺野多恵マネジャー、田中孝祐 GSI グループマネジャー、表野夏樹 GSI グループマネジャー、石井賢一郎社会教育マネジャー、小塩明伸戦略企画・IR 推進室室長、東城俊太郎開設準備室長、鈴木太平戦略企画・IR 推進室アシスタントマネジャー、星野樹 (記録)

「挨拶と概要説明 (当日スケジュール)」 上村佳世子副学長

外部評価懇談会の冒頭、上村副学長よりスケジュールならびに概要説明があった。今年度のテーマは「学修者本位の教育の工夫」としている。高等教育の目指すべき姿(中教審,2018)に対して、本学の教育プログラムの特徴と課題を発表する。

「経営学部初年次教育プログラム「初年次ラボ」の概要」 平田博紀 経営学部教授

概要説明の前に初年次ラボについての動画が紹介された。その後、資料に基づき、「経営学部初年次教育プログラム「初年次ラボ」の概要」について説明があった。主に経営学部

おける初年次ラボの位置づけ、初年次ラボの目的、昨年度（2023年度）の初年次ラボの取り組み、LA（Learning Assistant）の配置についての説明がされた。

経営学部の教育のスローガン「まずはやってみる」ことであり、失敗を恐れず挑戦し、挑戦することに価値があることを学び、更に、実践（経験）から理論へと学びの順序を変える取組をしている。「まずはやってみる」ことを主眼に置いている。

次に、初年次ラボの目的は以下の通りである。

- ① 経営学領域の専門的な課題に触れ、その解決策を企画する学習環境の中で、仲間とともに悩みながら困難を乗り越える経験を通して、「自立と共生」の意義を理解する。
- ② 大学選択時にイメージした実践的な学びを通して、社会で求められる能力の獲得に向けた基盤となる資質を養成する。・社会で期待される能力、資質を1年生から意識する。

初年次ラボを通して、社会から求められている力を理解させている。具体的には、解決策の提案、グループワークによる解決策の検討、ヒアリング調査、チームビルディングの実施などである。昨年度は、前期に学内PBLとして、「大学の課題を解決する」をテーマに自分が学んでいる大学での課題を学生自身が自分事として捉え、解決策の提案をしていくプログラムである。また、後期は学外PBLとして、企業（6社と連携）との連携を図り、企業の課題を学生目線で課題を解決していくプログラムである。

なお、初年次ラボは、先輩学生が大学における経験や学びを後輩学生に伝える。（Learning Assistant）ことも行っており、学年を越えた結び付きが生まれる契機としている。

「カリキュラムにおける実践教育」 米澤純子 保健医療技術学部教授

資料に基づき、「カリキュラムにおける実践教育」について説明があった。

「専門的知識・技術を基盤とした看護実践」を実現するためのDPが紹介された。

看護学科は、「人材育成の冰山モデル」として、専門職として看護実践をする行動には、知識・技術だけではなく、態度（カリキュラムポリシーの価値観）が重要である。それが、根底、土台となって、初めて行動ができるものと考えている。

次に、DPに基づいたカリキュラムの特徴としては、各学年で臨地実習が設置されており、実習こそが実践という場の学びと習得の場としている。また、各学年で実共通オリエンテーションを実施しており、共通オリエンテーションでは、対象者の保護、守秘義務と対象者の個人情報取り扱い、実習態度・行動、対象者との関わり、服装、健康管理、感染予防対策などを説明している。共通オリエンテーションでの説明を理解した上で、学生は「看護学実習に関する誓約書」を提出する手続きをする。学生は、実習を通して、専門職としての倫理観を身に付ける。

更に、専門的知識・技術を基盤とした看護実践を身に付けるための授業内容構成では、学生が主体となってテーマに基づいた学習、口頭試問として教員から指定された内容を口

頭で説明するなど、文脈の中から捉える力、自身の言葉で表現する力を意識した授業を展開している。そのために、アセスメントのプロセス、グループワークの活用を行っている。

看護学科では、カリキュラムを通して獲得できる力（能力）を以下の6点あると考えている。

- ①対象に真摯に向かう姿勢
- ②対象の健康課題を捉える力
- ③対象に必要な支援を考える力
- ④適切な支援を実践できる力
- ⑤対象の健康・生活をまもる責任
- ⑥自身を振り返り成長し続ける姿勢・

今後は、1期生が立ち上げたBLS（一次救命処置）講習会などを活用するなどして、能力を高めていくとともに、本学で学んだ看護師間の繋がりを図っていききたい。

「文理融合及び企業・行政等との連携教育ーヒューマン・データサイエンス学部構想」

浜正樹 新学部設置準備委員長

資料に基づき、「文理融合及び企業・行政等との連携教育ーヒューマン・データサイエンス学部構想」について説明があった。主に新学部概要、教育体制について、PBL型授業と企業連携についての説明がされた。

現在、構想中の新学部は、健康・福祉（嚔下障害×AIによる学習）、環境（廃棄ビニール傘×データ収集と分析）など、既存の学部の領域とデータサイエンスを掛け合わせて、新たな教育を構築しようと考えている。

次に、養成する人物像としては、人と人、人と地域、人と自然が共生する社会創造（社会課題発見 × データサイエンス・AI活用 × プロジェクトマネジメント）において、社会課題の解決に技術をフォーカスしてマネジメントしていく、つまり、データの利活用ができる、データを扱う専門家と協業できる人材を育成したいと考えている。そのためには、量的評価と質的評価の双方が必要であり、学生の学修意欲向上を支えるための評価が求められる。そこには、教員側の評価方法への十分な理解が重要だと考える。

更に、数学とプログラミングに対するフォローが不可避であり、高校「情報Ⅰ・Ⅱ」や探求授業からの接続を期待している。そのように考えていくと、学部としてのリベラルアーツ教育の認識が重要ではないかと思っている。

教育内容としては、PBL型授業の配置を構想している。具体的には、1年次は課題解決事例の見学・体験とディスカッション、2年次は1ヵ月単位程度の就業体験を行い、社会課題把握を行う。3年次からは企業・地域と連携し、社会課題理解やプロジェクト策定を行い、4年次の卒業研究に結び付けていく。

最後に、新学部の特色としては以下の4点がある。

- ①文理融合型教育

- ②社会課題とデータサイエンスの適合性を考慮したコース制
- ③プロジェクトマネジメントスキルを重視した PBL 教育
- ④コース制：地域・環境、生活・健康、ビジネス・文化

「学修者本位の教育における評価」 西方浩一 教務部長

資料に基づき、「学修者本位の教育における評価」について説明があった。

昨年度の外部評価懇談会での外部評価者からの意見を踏まえて、各学修成果指標の実施目的、DP との整合性を検討しながら整理してきた。

まず、各学部・学科におけるアセスメントの再考（アセスメントの内容の整理）についてアセスメントポリシー案作成を行った。具体的には、一つ目は、アセスメントポリシーの構造を検討し、大学共通で行うものと、各学部・学位プログラムで行うものにと整理した。二つ目は、大学共通アセスメントチェックリストを進めている。現在、各学部・学科のアセスメントチェックリストも作成中であり、教学 IR 担当と連携し分析方針を検討中である。三つ目はルーブリック評価の検討である。学生が自らの学修状況を可視化し、具体的に振り返ることができ、面談時の活用にも有効とれるような評価を検討している。四つ目は学修ポートフォリオ（DP 到達度チェック）の検討である。

今後は、学修者本位の教育の実現するために、学修者目線での教育、4 年間の学修成果、学位プログラムレベルでの学修成果を再考することが必要だと考える。

一方、学生、教職員への負担の軽減、アセスメント結果の IR 分析と教育への活用については引き続き課題となっている。

外部評価委員の講評

【川島啓二先生】

2018 年の中教審の答申は、今まで教学マネジメントシステムによる内部質保証のシステムの重視から学修者個人にフォーカスしていくような方向の可能性が示された。学生個人の履修科目モデルは異なり、4 年間の科目履修選択をした後に学生個々のカリキュラムが成立するという観点（多様性の観点）に立つならば、学修者本位の教育を実現する必要があるということになる。学修者本位の教育は、「学修者自身が何をして、どのように成長したかプロセス・結果について、学修者本人が説明できるようになる」ということだと思う。

・経営学部初年次教育プログラム「初年次ラボ」について

1 年生ゼミという位置づけの取り組みと考えると、1 年生から企業課題に対応するという事は納得できる。必修科目として全員が履修するという考えなのか確認したい。学内 PBL の取り組みはおもしろい。学生自身が在籍する大学の組織、その組織のミッションを知るということは大事である。初年次教育の課題でもある学生の成功にもつながる取り組みである。15 回の授業の後に振り返りの機会を作り、それぞれの学生の成長がどうなのかというところが把握できる機会があった方がよい。デザイン思考のプロセスであるプロトタイプ

を持たずに、「まずはやってみる」がどのようにイノベーションにつながるのか知りたい。

・看護学科のカリキュラムにおける実践教育について

科目内容を実習科目中心に丁寧にご説明いただいたので、わかりやすかった。医療に関わるということでミスが許されない世界での実践教育ということで、実習に関わる学生への対応についてなどしっかりと対応していると理解している。「お局様がなくなった臨床」という言葉の意味を聞きたい。

・ヒューマン・データサイエンス学部構想について

2026年度開学予定ということで、非常によく練られている。データサイエンスという体系的な知識だけを学ぶのではなく、体験重視のプログラム作りを理解した。PBLも色々なバリエーションの中でどのような組み合わせをしていくかということがよく考えられている。今後、地域と協議するプラットフォームを作る流れになると思う。

・学修者本位の教育における評価について

アセスメントポリシーの作り方が、科目レベル、プログラムレベル、大学レベルという単純なやり方をしておらず、このようなやり方もあるのかと理解した。ルーブリックが肝になる。ルーブリックを通して自覚的に「学生自身が学習成果を達成したのか、何ができるようになったのかを自身で説明できる」ようになっていくことが必要。

【杉谷祐美子先生】

大学全体として経験学習を重視していて、その中での振り返り、気づきを大切にしていると感じている。

・経営学部初年次教育プログラム「初年次ラボ」について

学内PBLは、自校教育としても機能している。大学の問題を学生自身の身近な問題として捉えるチャンスがあり、帰属意識を芽生えさせるという意味でも効果的だと感じている。学外PBLでの企業との連携では、卒業生が就職している企業もあり、支援なども含めて先輩や卒業生がロールモデルとなるよい取り組みである。トライ&エラーの中で、じっくり学生を成長させていく取り組みである。

・看護学科のカリキュラムにおける実践教育について

経営学部の取り組みと対照的に感じたのが、看護学科の取り組みで、学生自身が至らない部分を実感し、対象者に向かう臨地実習の前に厳しく指導することが必要だと感じた。専門分野によってそうしたバランスが違うと思うが、事前に厳しく指導していく部分と、経験から入って気づきを得る部分をどのようにカリキュラムで構成していくか興味深い。数年前に入学した学生が出来ていたことが、だんだんできなくなっている原因が、コロナの影響なのか、学生の変化なのか、判断しかねる部分はあるが、興味深い。人材育成の冰山モデルは、コンピテンシーモデルでは一般的に測定しやすい知識・スキルは氷山の上の方に来る部分だと思ったので、下の部分に来るのは不思議に感じた。

・ヒューマン・データサイエンス学部構想について

既存の学部の領域と組み合わせる部分を見つけて、新たなシーズとニーズを求めて作るというのは大変意義ある取り組みだと感じている。文理融合系の学部は、カリキュラムを文系・理系をどのように融合していくのか（カリキュラムをどう組むのか）、そして、実際に学生が必修・選択必修としてしっかり修得していたために、どのような縛りがかかるかが重要になってくる。文系の学生が理系の科目で目標に到達しづらいという問題があるので、入学選抜をどのように関連付けていくのかが気になった。

・学修者本位の教育における評価について

昨年度までの外部評価委員のコメントを踏まえて、取り組みをされている。その一方で、各学部の取り組みがアセスメントにどうリンクしているのか気になった。連携企業からの評価、学内PBLで取り組んだ大学職員からの評価、実習先からの評価、卒業生の意見、などアセスメントとして評価しづらい部分はあるが、それらのコメントで十分成果として上がっているように感じる。取り組みから生み出されていくようなデータを大事にしつつ、整理していくことは可能だと感じる。

学修の成果を学修者が実感できることを学修者本位と位置付けているが、学修者が何を望んで学生生活を送りたいかという部分も大事であると考えている。

外部評価委員のコメントを受けて

【平田博紀 経営学部教授】

初年次ラボは必修科目になる。1年全員が履修する。2022年度から準備をした。学生の振り返りの機会は課題と考えている。昨年度は最終報告会に加えて、初年次ラボの活動について振り返りのレポートを提出してもらった。振り返りの方法については、まだ検討の余地があると思っている。いまの学生たちは、周りからどう思われているかというところがあって、色々なアイデアを出すということに抵抗感がある学生が非常に多い。最初から完璧なものを出さなければいけないというプレッシャーからまず解放して（まずはやってみる）、プロトタイプを作った上で課題解決を考えていき、体験を通して感じてもらうことが大事だと思っている。

【米澤純子 保健医療技術学部教授】

臨床現場では 新人の離職率が高い。離職しないようにという扱いが現場でも問題になっているが、新人にあまり厳しく指導しないという流れがあり、そういう意味で「お局様がいなくなった臨床」という表現をした。人材育成の氷山モデルは、氷山の上は見やすい（外から確認できる）行動として記載すべきでした。

【浜正樹 新学部設置準備委員長】

地域社会との協力系のプラットフォームという流れになるだろうという話がありまし

が、現在も「まちラボ」という連携機関と持っているが、新学部開設に伴い少しバージョンアップしていこうと考えている。教育なのか、シンクタンクのような役割なのか、をある程度線引きしておかないと、地域の方が熱心に課題を提供してくれると同時に質を要求してくるケースがあって、教育の範囲を超えてしまつて関係が悪化する場合もあるので、教育としてそれに協力いただくということを説明していく必要があると考えている。

数理系のフォローは大きく、カリキュラムでの縛りはしていく。能力の高いデータ分析ができる人にも対応するプログラムを作成していくが、まずは連携（コミュニケーションが取れるということ）を目指していきたい。データ分析の内容については、データサイエンス協会や IPA といった公的機関が出しているスキルセットを見ながら配置を想定していく予定である。

【西方浩一 教務部長】

ループリックが肝になってくるので、今後検討していかなければならない。学生がどの程度のレベルまで学修が進んでいるのかということ振り返る仕組みを作っていきたい。

企業、卒業生、実習先からのコメントも成果として有用であるので、そうしたコメントをうまく活用できるような仕組みを考えていかなければならないと感じた。

「学長挨拶」 福井勉 学長

学修者本位の教育についての発表、ならびに川島先生、杉谷先生からのコメントありがとうございました。両先生におかれましては、長い期間本学の実情をご覧いただき、毎年有益なコメント頂戴しております。

川島先生より「学修者個人が自分の成長を感じる事が重要」、杉谷先生より「経営学部取り組みは自校教育としても捉えられる」というコメントをいただいた。また、アセスメントへのご示唆をいただきました。特に、本学のアセスメント確立プロセスは、現在進行中であるが、昨年の先生方のご意見により軌道修正がなされてきたというふう感じている。今後の改革に活かしていきたい。

以上をもって、令和 6 年度外部評価懇談会が全て終了し、上村佳世子副学長が閉会を宣言した。

以上